

## 生徒指導における管理職の役割 スクールカウンセラーの選択といじめへの対応

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松木, 健一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10098/5427">http://hdl.handle.net/10098/5427</a>

## IV

## 生徒指導における管理職の役割

## スクールカウンセラーの選択といじめへの対応

松木健一

## はじめに

生徒指導に関して管理職のはたす役割は大きい。2006年の10月以降いじめによる自殺が多発している。それに伴い、スクールカウンセラーを全公立中学校に配置するようになった。しかし、いじめはスクールカウンセラーが配置されれば、それで解決するといった類の問題ではない。また、効果がある場合であっても、どのようなスクールカウンセラーをどのように配置するかも重要であろう。ここでは、2006年から急増したいじめと、スクールカウンセラーの配置について、雑誌等にまとめたものを整理して示したい。

## 1. スクールカウンセラーの選択

深刻化し多発化するいじめ事件を受け、平成19年度の文部省予算では、全公立中学校約1万校にスクールカウンセラー（以後SCと略す）を配置するという。どの学校にもSCが配属される時代が日本にもやってきた。ところが、そのSCの仕事ぶりを見ると、「いてありがたい」との声は聞かぬが、十分に活用できているとは思えない。その最大の理由は、学校の管理職がSCの人柄や仕事内容を見極め、SCの校内位置づけを明確にしていなかったからである。SCが活躍できるか否かは、管理職の見極めにかかっていると言っても過言ではないだろう。ここでは、管理職がSCの活用に先立ち何を見極めればよいのかについて整理

したと思う。

### (1) 治療的カウンセリングとスクールカウンセリングの違いを見極める

私は小児科外来で心身症、障害、不登校等のカウンセリングを行っている。ここに来る子どもたちは気心が知れてくると、いろいろ話してくれる。中には担任教諭の悪口を思いっきり話して帰る生徒がいる。「へー、そんなにひどいやつなんだ！けしからん担任だ！」私があんまり同調するものだから、その子は「まあ、いいところも少しはあるけれどね」と付け足して、楽しかったエピソードをボソボソ話してくれた。学校ではなく病院にいる私にとっては、その子のその付け足しが大切なのである。担任についての愚痴を吐き出した後、関係の再構築が始まっているからである。一方、教師がカウンセリングを行う場合にはそうはいかない。教師が評価者であること、あるいは、評価者に近い立場にいる人間であることを、子どもたちは瞬間的に嗅ぎとって口をつむぐ。

ところが、今度は反対に病院ではできないことも沢山ある。子どもたちの話を聞くことはできるのだが、それ以上手を出すことは困難だからである。子どもの話から学校内の厳しい現実が見え、同時にこの子一人の力では解決できないと分かって、唐突な介入は子どもと教師の間の不信感を増長させるばかりである。「一緒に学校の中の活動を見守ることができたら」と日々願いながらも、己の無力さを感じずにはいられない。

この点、SCは恵まれている。学校の中に居場所があり、かつ教師ではないSCは、カウンセリングを行いつつ、同時に学校の教育活動にも参加できるからである。学校生活のアドバイスを子どもにも、教師にも行うことができる。これがSCの最大の利点でもあり、そしてまた、最大の落とし穴でもある。子どもから見ると、教師と一脈通じるカウンセラーは信用におけない。SCは学校にいながら学校的でない空間を創造することが必要なのである。

一方、管理職からすればそういうSCの態度に対して、学校の中に異物を飲み込んだような違和感をおぼえるに違いない。SCはどこか「よそよそしい」「はっきり言わない」「煮え切らない」そんな人物に見える。SCが導入され始めの頃、治療的カウンセリングを行ってきたSCには、特にその傾向が強かったように思う。実際のところ、治療的カウンセリングとスクールカウンセリングの違いを飲み込めていないSCも多かった。SCと子ども、SCと教師、SCと管理職の微妙な距離感覚、この感覚を大切にできるSCは有能なSCである。逆にSCから見ると、学校内のことを全て自分で仕切ろうとし、任せられない管理職は最悪な上司である。こんな管理職に当たってしまったSCは、大学にでもやってきて愚痴らないことにはやっていけない。

### (2) スクールカウンセラーの経歴と年齢を見極める

(誰がスクールカウンセラーになるのか)

こころの時代なのだろうか。心理士やカウンセラーと名のつくものを教育関係に限って上げてみても、臨床心理士、学校心理士、臨床発達心理士、認定心理士、家族心理士・応

用心理士・認定健康心理士・メンタルケア心理士・教育カウンセラー・交流分析士・認定カウンセラー・キャリア・マネジメントカウンセラー等が、学会や協会から認定されている。この外にも国家資格が論議されていた医療心理士や小規模の団体認定資格を含めるときりがないので、この辺でやめておこう。SCの多くは、臨床心理士や学校心理士である。しかし、地域によっても事情は異なる。さらに今後SCの需要が増えれば、人手不足も生じてこよう。何せSCは高学歴でかつ不安定な非常勤職員である。質を落とさずに増産するのは容易ではない。そこで、当分の間は様々な経歴のSCが存在することになる。前述したように病院等での治療的カウンセリングの経歴が長い方もおられよう。しかし、長いからといって、スクールカウンセリングができるわけではない。あなたの学校に配属されるSCはどのような経歴で、どのようなことを得手としているのか、見極めることが重要である。昨年までのSCと同じ役割を当然のごとく期待するところから、管理職の失敗が始まる。

(資格よりもSCの人柄や年齢が大きく影響する)

資格もさることながら、SCの年齢も大きな要因である。例えば、大学院出たてのSCに保護者の面談や教師の相談を依頼するのは酷なことである。私は20歳代から教育相談を生業としているのだが、はやく40歳になりたかった。同じアドバイスをしているのに、いやむしろ、私の方が筋の通った話と思われても、相談者は隣の40歳のカウンセラーの話に頷くのである。悔しかったが年齢の重みはどうにもならない。

それでは、若いSCはだめかという決してそうではない。若いからこそできる関係づくりがある。福井大学では12年前から不登校児や軽度発達障害児の支援活動を学生が行う事業(ライフパートナー事業)を、教育委員会と連携して、大学の授業として行っている。学生は、不登校児等の家庭や相談室、各教室に出かけ個別の支援を実施している。現在130名の学生が200名の子どもたちとかかわり、毎週授業の中でケース検討を行っている。10年前、この企画を学会で報告したところ、多くの専門家からご批判をいただいた。カウンセリングの力の字も分からない学生が、不登校児と関って危険であるとの指摘であった(この10年でこのような活動についての評価が全く逆転してしまったから不思議なものである)。参加しているのは教員養成系の学生であるので、大学を出れば否応なく子どもたちと関らなければならなくなる。当時「不登校」という言葉だけ知って現場に行くよりも、「不登校児と一緒に遊べた」、「楽しいときを共有できた」そんな経験を持って教師になってもらいたいと考えていた。

そして、彼らは実によく不登校等の子どもたちと遊ぶことができる。私にはとても付いていけないようなカタカナの流行語を言い合いながら、活動を共有している。一緒に汗水を流すと、知らず知らずの内に子どもに自己開示が見られるようになってしまう。若いSCは、無意識の内にスクールカウンセリングを行っているのである。

治療的カウンセリングとスクールカウンセリングの最大の違いは、対象とする時間軸の違いである。治療的カウンセリングは、過去から現在に至るまでを振り返り、自己を意味づけしなおすことに主眼がある。現実を踏まえ自分を再構成できれば、クライアントは自

ずと現在から未来に向けて歩みだしてくれる。一方、スクールカウンセリングでは、過去から現在までの自己の捉えなおしをしながら、現在から未来に向けて歩みだすことを援助しようとする。その歩みは、原初的でもいい。とにかく一緒に活動を共有しながら、子ども自身が前に進もうという気持ちになってくれることを大切にしようとする。若いSCと一緒に歩もうとする姿勢は、子どもにとってどんなにかうれしいことか。

### (3) スクールカウンセラーの業務と学校の現状を見極める

すでに述べてきたようにスクールカウンセリングは、治療的カウンセリングの要素を含みつつ、未来に向かって子どもが歩みだすことを援助しなければならない。そのためには下記のような業務が可能であろう。

#### ① 治療的カウンセリング

SCは学校の中で教師にも他の子どもにも気兼ねすることなく、相談することができ、子どもが居ることのできる場を確保しなければならない。SCの業務はカウンセリングを行うことで、子どもが自己の歩みを振り返り、状況を分析して再構成することを援けることである。

#### ② アセスメントとスクールカウンセリング

自己のこれまでの在り方を振り返るだけでなく、現在から未来に向けて歩みだすことを援けることも業務である。これには、気がかりな兆候の見られる子どもに対して行う予防的カウンセリングや、全ての子どもを対象に、子どもの発達そのものを援助する開発的カウンセリング等がある。予防的カウンセリングから開発的カウンセリングの色合いが濃くなればなるほど、SCは子どもを教育的に意味のある方向に導こうとすることになり、より、教師に近い業務内容となってくる。そこで、SCと教師の役割関係の構築が必要になってこよう。SCは、しばしば学級経営の初期段階や問題の予兆があったときに、構成的グループエンカウンターによる集団づくりや、ストレスマネジメントによるソーシャルスキルの獲得を学級担任から依頼されることがある。

また、さまざまな検査用具を用いての教育アセスメントを依頼されることもあろう。前述の技法も含めこれらの技法によるかわり、子どもの中心的な「学び」の活動に先立って行われる一時的な活動であったり、不安な兆候があったときに部分的に挿入される活動であったり、あるいは、補助的な活動であったりする。これらの活動は部分的であるからこそ、教師と業務の住み分けができているとも言えるが、SCにとって見れば、中核的な学習活動の中で子どもの育ちに触れることのできないもどかしさを伴うことにもなる。技法に満足し、このもどかしさを感じないようなSCは、最後のところで信頼できないSCである。また、SCに技法の実施だけを求める担任教諭は、子どものことが見えていない教師でもある。

#### ③ 教師や保護者、あるいは、学校組織へのコンサルテーションとコーディネーション

学校の中で悩んでいるのは、子どもだけではない。子どもにうまく係われないでいる教

師や同僚関係で悩んでいる教師もおられよう。そのようなときに、直接のかかわり手である教師や保護者に対する支援が必要になる。教師や保護者の自己決定を尊重しつつ、必要な情報の提供や、アドバイスを行うことになる。しかし、コンサルテーションが成立するためには、SCは教師や保護者の信頼を勝ち取ることが先決である。SCはすぐにコンサルテーションを実施しようなどとは考えずに、まずは1事例ずつ丁寧にかかわり、学校の中で実績を積むことが重要であろう。

ここまでSCが行う業務に触れてきたが、これらの業務の全てを1人のSCに求めるのは無理なことである。どの業務を中心に行ってもらうかは、SCの能力と学校の状況を踏まえて、管理職が依頼すべきことであろう。特に近年の学校の状況は、大きく変わってきている。最後に、SCの業務と関連する学校の変化を取り上げて、まとめとしたい。

#### (子どもの変化)

いわゆる軽度発達障害と言われる子どもたちが、文科省によると6.3%いるという。この子たちは、不登校や心身症、あるいは非行といった2次的・3次的障害を引き起こしている場合が多く、障害児教育との境界はなくなっている。学校では特別支援教育コーディネーターとSCとの役割分担や連携を考慮にいれなければならない。

#### (保護者の変化)

学校にとって頭を悩ます問題は、子どもの問題以上に保護者との関係のトラブルである。学校の対応のまずさや情報提供の乏しさが原因であることが多いが、保護者自体も大人気ない、いや、大人でない場合が多い。むしろ、子育てしながら大人になっていくのが、現代社会なのだとは割り切ってサポートすることが必要であろう。その場合SCにどのような役割を演じてもらうか、SCの能力を見極めながら決定しなければならない。

#### (教員の変化)

しばらく前の学校は教員だけの単一職種社会であった。しかし、近年の学校は軽度発達障害児への支援員、低学年の支援員、相談室登校児への支援員、SC、地域のボランティア、ゲストティーチャー等、本当に様々な人が出入りするようになった。担任教師が一人で学級を手づくりするという時代から、学級に出入りするそれぞれ専門性を持った人を、担任教師がコーディネートする時代が変わってきている。教師には、SCと同じようにコーディネーターやファシリテーターとしての能力が問われるようになっていく。SCの機能を教師に移植していく。そのようなことを念頭に、SCと教師の関係づくりを進めなければならない。

さて、いかがであろう。ここで提供した視点が、SCの人柄や仕事内容を見極め、SCの校内位置づけを明確にするために役立ただろうか。SCが活躍できるか否かは、管理職の見極めにかかっている。管理職の健闘を期待したい。

「教室の窓 教育情報」東京書籍 Vol.21 (2007年4月)

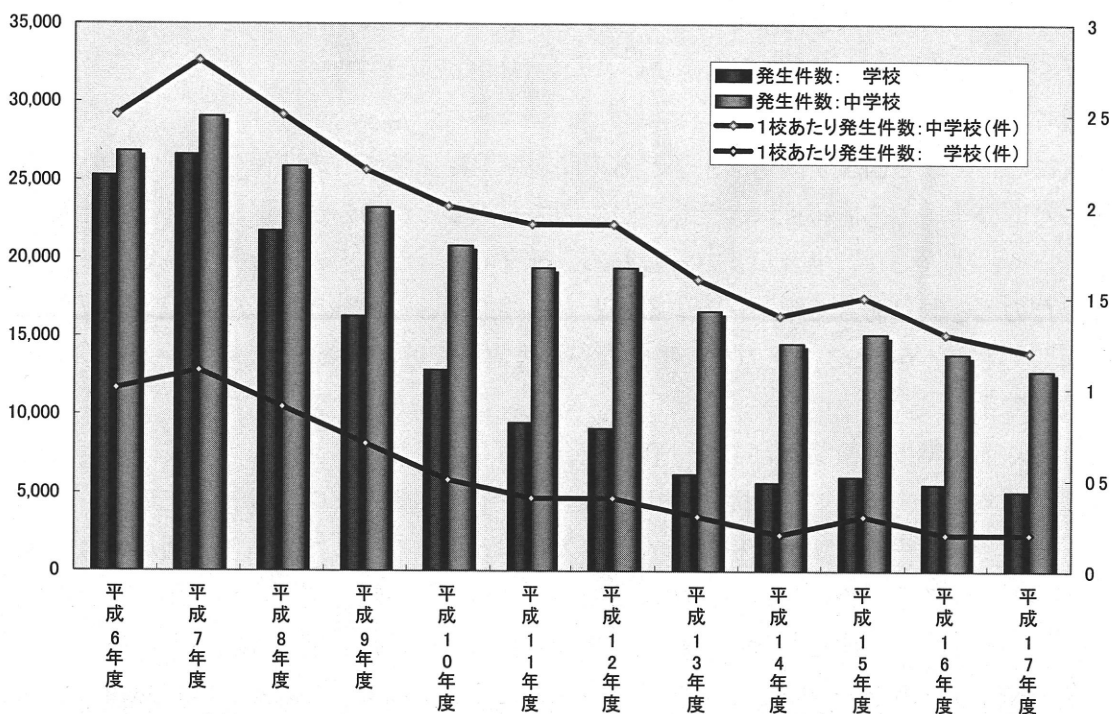
## 2. いじめへの対応

### (1) 昭和のいじめと平成のいじめ

私は、教員養成系学部で教育相談の講義を担当している。子どもたちから相談を受けるのが仕事である。平成 18 年の秋に多発したいじめによる自殺は、あまりに不意で、当惑と自責の念が残るものとなった。文科省の学校基本調査ではないが、私のところでは少しずついじめの相談は減少していた。(学校基本調査では昭和 60 年以降いじめは減少している。ただし、平成 6 年以降は調査項目等が異なるので、その前と単純比較はできない。)

いじめは、いじめる人間といじめられる人間の問題ではない。その人たちが属する集団に何らかの圧力や統制が、長期にわたってのしかかってくる時に起きる集団力動の問題である。集団の構成員は、圧力等に抗しきれなくなったとき、圧力等を特定の構成員に向かって吐き出す。また、いじめた人以外の構成員も、攻撃となって吐き出される様を見ることで、ストレスの解消をしている。それがいじめである。

いじめの発生件数 (学校基本調査：文科省)



昭和 60 年代は、受験競争・校内暴力・厳しい校則等、いずれも子ども集団に重圧となる要因が沢山あった。そうでなくとも日本の学校は横並びで、生活全般にまで及ぶ拘束力の強い共同体である。いじめが起きてもおかしくはなかった。

しかし、その後、学校は行かなければならないところ、あるいは、学校で勉強して偉くなることはいいことといった学校神話が徐々に崩壊し、集団自体の凝縮力が弱まってきていた。辛ければ登校しなければよいのである。むしろ不登校といった現象の方が社会問題化していた。さらに、「ゆとり教育」の中で子どもたちの受ける学校での集団ストレスは減少

していると、私は思い込んでいた。

昨年表面化したいじめ事件は、私の短慮を曝け出させてしまった。いじめはずっとあるのである。いじめの起きる集団は濃密な凝集性であるがゆえに、いじめの被害者が事件を公表することは、集団からの決裂を覚悟するくらいの勇気が必要である。なかなかできることではない。マスコミ等の報道は、問題の不当性や事の緊急性を誰もが認め易くなる雰囲気をつくりだした。その結果、公表する勇気を与えてくれもし、また悲しい解決への連鎖も引き起こすこととなってしまった。小児科の外来で相談を受けていた私には、学校内の相談と違い、このような勇気を得た子どもや、身体症状を併発するまでになった子どもだけがやってきていたのかもしれない。今回のようないじめ報道がなくても、子どもがいじめを声に出せる常的な仕組みの構築を急がねばならない。

## (2) 関係が疎になればなるほど密になる集団

ところで、学校での外的圧力や拘束力は、昭和 60 年代よりも明らかに減少していると思われるのに、なぜ、子どもたちはいじめを引き起こしてしまうのであろうか。それは問題が外圧だけではないからだろう。子どもたちの中に生じてきている関係づくりの変化に目を向けなければならないように思われる。現代の子どもたちは、少ない兄弟関係の中で、保護者にしっかり見守られて成長している子が多い。それは、他者に強く働きかけなくとも配慮してもらえる関係であり、また、強引に働きかけられることも少ない関係である。このような関係の中で成長すると、肌と肌、感情と感情が直接ぶつかり合うような関係は恐怖である。子どもは障壁を設け他者の侵入を防御すると同時に、異様とも思えるほど配慮しあう関係を作り出す。対立が顕在化すると、自分は終わりではないかと思ってしまうので、対立の忌避が最優先事項となる。そして、配慮し合えばし合うほど、一日中べたべたと共同生活する時間が長くなる。また離れること自体が不安ともなってくる。こういった共同生活は、極めてストレスの多い状態である。そこに外圧が加われば、いじめは起こるべくして起こるのであろう。

## (3) 教育再生会議からの提言を超えて

平成 18 年の 10 月には教育再生会議から「いじめの緊急アピール」が出された。このような教育問題は、すばやく政策や政治に反映できるものではないと思っていた私には、驚きと幾分かの期待を抱かせるものであった。緊急事態であることを多くの人が認識して、「社会総がかり」で自殺の連鎖を食い止めなければならなかったからである。しかし、1 ヶ月後に出された「いじめ緊急提言」は、悄然とするものであった。相変わらず緊急対処であった。それも、いじめをする子に対する別室指導や社会奉仕活動への参加、放置・助長する教員の懲戒処分等、直接当事者に対する処分を中心とするものであり、その集団の有様、あるいはその集団が属する学校集団や支えるはずの教員集団の有様、さらには、集団力動を引き起こしてしまうような社会の有様に対する言及がなかったからである。冷静に、



学校組織や社会システムにメスを入れなければいじめ問題は解決しまい。与えられた紙面上、全てを言及することはできないが、まずは学校の中からできることを考えてみよう。

① 協働を学ぶ。PISA 型学力は、最終的に生涯にわたって学び続け、人生をつくり社会に参加する力を求めている。防御バリアを張って侵入を阻止しつつ配慮する関係から、社会参加しつつ協働しながら創造する活動を、学校の学習活動として位置づけたいものである。協働は、両刃の剣である。関係が密になるだけ、いじめも起きやすい。しかし、協働の仕方自体を学ぶ、個と集団の関係を学ぶ、民主主義を学ぶことから逃走したら、もっと深刻な事態が待っている。

② 教師指導の授業では、子どもの関係（いじめ）が見えてこない。子どものいじめが教師に見えない理由は、指導的な授業だからである。教師と子どものコミュニケーションが中心では、いじめは見えてこない。その結果、教師はいじめを軽く見てしまう。子どもの主体的な学習活動では、子供同士の関係が反映する。教師は、関係づくりと一体となった学習活動をサポートすべきである。

③ 教師の協働を実現する。協働を唱える人間ほど、協働が苦手でもある。大学教員をはじめ、とかく教師は協働が苦手である。いじめ問題を自分だけで解決しようとして、さらに深刻化させてしまう。同僚性の構築、世代サイクルの活性化、どれも教師集団が失ってきたものである。まずは教師集団の抱えるストレスの低減から取り組む。そんな身近なところから体質改善をしていきたいものである。

(開隆堂出版 きょういくeye 2007.6)